

論文

ルイス・キャロルの『アリス』シリーズにおける二者性の表現

角 田 あさな*

序

ルイス・キャロル¹の二つの『アリス』作品²において、主人公アリスには意識の分裂や身体の大小など、様々なかたちの二者性³をみてとることができる。そしてそのことは、作品のいたるところに反映されている。アリスの二者性は、帽子屋と三月ウサギというキャラクターの二者性にもつながる。作品の中に登場する帽子屋 (the Hatter / Hatta) と三月ウサギ (the March Hare / Haigha) は、物語の中で常に二者で現われる。彼らは、「帽子屋のように狂った (mad as a hatter)」「三月ウサギのように狂った (mad as a March hare)」という慣用句から、「狂気」の代名詞として生みだされたキャラクターであり、作中においても「狂気 (mad)」と呼ばれる存在である。

哲学者のジル・ドゥルーズは、キャロル解釈でもある著作『意味の論理学』(1969)の第12セリー「パラドックス」において、帽子屋と三月ウサギについて以下のように述べている。「狂人であるためには二人である必要がある。誰でも常に二人で狂人である」⁴。本稿では、『アリス』シリーズにおける二者性の表現について、中でも作中において狂気とされる帽子屋と三月ウサギに注目し、二者であるとはどういうことか、ドゥルーズのいう「二者で狂う」とはどういう意味をもつのかを考察する。本稿の目的は、『アリス』シリーズで「狂気」として示されていることが、どのような事態であるのかを明らかにすることである。

また本稿では、帽子屋と三月ウサギが主人公であるアリスを除いて唯一、『不思議の国』と『鏡の国』の両作品に登場するキャラクターであることに注目する。そして、彼らだけが二つの作品に現れることができることの意味は、帽子屋と三月ウサギの狂気性の内実に関わるという解釈を提起する。

1. アリスの一人二役

作品の主人公であるアリスは、作中でおかしな子 (curious child) として描かれている。

「さあ、そんなに泣いたってむだよ！」とアリスはいくらかきびしい口調で自分をしかりつけました。「たったいま泣くのはおやめなさいと言ってるのよ！」アリスはよく自分に向かってなかなか立派な忠告をするのでした。(そのことばを守ることはめったになかったのですが)。そしてときには、目に涙が浮かぶほどきびしくしかりつけることもありました。いつかなんか、自分を相手にクローケー遊びをしているうちに、自分をだましたからと言って、自分で自分の耳をぶとうとしたことがあったのもおぼえています。この風変わりな女の子は、ひとりで二役を演ずるのが好きなのでした。⁵

アリスは一人二役をし、何度も独り言をいう場面が登場する。アリスは一人で二者を演じながら、『不思議の国』

キーワード：二者性、狂気、ルイス・キャロル、『アリス』、帽子屋と三月ウサギ

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2009年度入学 表象領域

や『鏡の国』を冒険するのである。

アリスがチェシャ・ネコに道を尋ねた際、狂っているひとたちのところへは行きたくないというアリスに対して、チェシャ・ネコは次のように答えている。

「いや、それはどうしようもないんだ」と、ネコは言いました。「このあたりではみんな気がふれてるのさ。おれも気がいい。あんたも気がいい」⁶

チェシャ・ネコはワンダーランドにいる者たちは皆狂っているのだという。狂うためには二者でなければならないとするドゥルーズの言葉を手掛かりとするなら、アリスは二者を演じることで、ワンダーランドに立ち入る資格を得ているのだと考えられるだろう。

アリスはまた、小さくなることと大きくなることによっても、二者に分割されている。一日のうちで小さくなったり大きくなったりを繰り返すことで、アリスは自己の同一性を見失ってしまう。

「まあ、まあ！きょうはなんておかしなことばかり起こるんでしょう！昨日はまだふだんと変わりがなかったというのに。夜のあいだにわたしが変わってしまったのかしら？思い出してみましょう。けさ起きたとき、いつもとおなじアリスだったかしら？すこしちがっていたようなおぼえがあるわ。でも、もしわたしが同じわたしでないとすると『いったいわたしはだれ？』というのがつぎの問題ね。ああ、これこそ大変な、なぜなぞだわ！」⁷

アリスは、『不思議の国』の第5章でイモムシに「おまえは誰だ？」と尋ねられたときも、ハトに「ヘビでないならばおまえは何だ？」と聞かれたときにも、上手く答えることができないのである。

アリスは二つの異なる意識を演じ、身体の大小を変化させる。その意識の分裂によって、また身体の変化によって、彼女は自分を同定することができない。これは、意識の分裂、あるいは同一性の分裂とでも呼べるような状態である。

アリスの身体の大小が変化するのは、彼女が飲物や食べ物を口にするによってである。しかし、物語の最後、第11章の裁判の場面においてアリスが元の大きさに戻りはじめるとき、アリス自身は何も口にしていない。このとき、その何かを口にしているのは帽子屋なのである。

マザー・グースの詩⁸をもとにした「誰がタルトを盗んだのか (Who Stole the Tarts?)」という裁判において、帽子屋は第1の証人として呼び出される。帽子屋は片手にティー・カップ、もう一方の手にバタつきパンを持った状態で表れ、その後には三月ウサギとヤマネが腕を組んでついてきている。女王ににらまれて混乱した帽子屋は、バタつきパンの代わりにティー・カップをかじってしまう。

[……] ぼうし屋は、からだの重みをたえず右足にかけたり、左足にかけたりしながら、こわそうに女王をみていましたが、うろたえたあまりに、バタつきパンのかわりにお茶のカップのふちを大きくひときれ、かみとってしまいました。

ちょうどこの瞬間、アリスはとても奇妙な感じがして、なにがなんだかわからなくなりましたが、やがてようやくその理由がのみこめました。からだがまた大きくなりはじめていたのです。⁹

帽子屋がバタつきパンのかわりにティー・カップをかじってしまったとき、アリスは段々と本来の大きさに戻り始める。アリスにおける二者性は、このとき、帽子屋に接続される。つまり、帽子屋と三月ウサギの二者性は、主人公アリスの二者性に関わるものであると考えられる。そうであるならば、狂気の代名詞である帽子屋と三月ウサギの狂気とアリスの狂気も関係しているのではないか。その関わりを考察するため、以下では、帽子屋と三月ウサギの登場する場面を、二者関係と狂気に重点を置いて読み直していく。

2. 帽子屋と三月ウサギの二者での現れ

本節では、『不思議の国』と『鏡の国』のそれぞれにおいて、帽子屋と三月ウサギが現れる場面を整理し、物語の中で常に二者で現れる彼ら二人の関係がどのようなものであるのかを明確にする。『不思議の国』と『鏡の国』はともに12章で構成されているが、その双方において、帽子屋と三月ウサギは第7章で登場する。

2-1. 『不思議の国』の帽子屋と三月ウサギ

『不思議の国』において、帽子屋と三月ウサギが登場するのは第7章 "A Mad Tea-Party" と、第11章 "Who Stole the Tarts?" の二箇所である。

帽子屋と三月ウサギは、異なる二方向に住んでいる。彼らが登場する直前の第6章で、道を尋ねたアリスに対してチェシャ・ネコは以下のように応えている。

「この方角にはな」とネコは右の前足をぐるっと回すように振って言いました。「ぼうし屋が住んでいる。それからこっちの方角には」と、左の前足を振りながら「三月ウサギが住んでるよ。好みのほうをたずねてごらん。ふたりとも気がふれてるのさ」¹⁰

迷ったアリスは三月ウサギの住む方へ向かうが、三月ウサギの家では三月ウサギと帽子屋と二人の間に挟まれたヤマネ（眠りネズミ）が共にティー・パーティを開いており¹¹、アリスは帽子屋と三月ウサギの二人に同時に出会うことになる。帽子屋は「カラスが机に似ているのは何故?」¹²という答えのないなぞなぞを出し、日付はわかるが時間はわからない時計を取り出しては「二日違っている!」¹³と嘆く。

アリスは三月ウサギの肩ごしに、いささかもめずらしくのぞきこんでいました。「なんておかしな時計!」とアリスは申しました。「その月の日づけはわかるけれど、今何時かということはわからないのね!」

「それでいいじゃないか?」とぼうし屋はつぶやきました。「あなたの時計なら、今が何年だかわかるのかい?」
「もちろん、だめよ」とアリスは大いそぎで答えました。「だって、一年というものはずいぶん長いあいだ同じまんなんですよもの」

「それこそまさにわたしの時計の場合だ」とぼうし屋は言いました。¹⁴

「長い間同じ年のまま」というアリスに対し、帽子屋が「まさにそれが私の時計の場合」だと述べるのは、彼が常にティー・タイムに留まっているからだろう。

また、後に詳述するが、帽子屋と三月ウサギは同時に現われるだけでなく、二人同時に狂っている。ハートの女王に "He's murdering the time!" といわれたことによりティー・タイムで時を止めた二人は、汚れたティー・カップを洗う暇もなく、席をずらしてテーブルに並べられたティー・セットの間をまわることになる。

アリスははっと気がつきました。「ここにこんなにたくさんお茶の道具が出ているのは、そのせいなのね?」とアリスはたずねました。

「そうとも、その通りさ」と、ためいきをついてぼうし屋は言いました。「いつでもお茶の時間なのさ、だから、茶わんを洗おうにも、とぎれめがないんだ」

「だから、しょっちゅう席を変えてぐるぐる回りしてるのね、そうでしょう?」とアリスは言いました。

「まさしくそうさ」とぼうし屋は言いました。「お茶の道具は使いっぱなしにしてるからなあ」

「でも、またふりだしにもどったら、どうなるの?」

「話題を変えたら、と思うがね」と、あくびをしながら三月ウサギが話をさえぎりました。「その話、もうあきあきするよ。ぎゃくにそのおじょうさんに、ひとつお話を願ったら、と提案するね」¹⁵

「はじめの席に戻るとどうなるの」というアリスの疑問は、三月ウサギによって中断され、考えることが許されない。時の止まったティー・パーティにおいて、次に進むことを考えることは禁止されているのである。

その後、帽子屋の無礼な振舞いに腹を立てたアリスは、自らその場を後にする。次にアリスが彼らと出会うのは、最後の裁判においてである。第3の証人として呼び出されたアリスは、女王たちが一組のトランプでしかないことを指摘して夢から覚めることになる。アリスが姉に起こされて気づいた時間は、夕方のティー・タイムであり、彼女はティー・タイムに間に合うように駆けていくのである。

2-2. 『鏡の国』の帽子屋と三月ウサギ

『鏡の国』では、まず第5章 "Wool and Water" で白の女王の未来の記憶の中に帽子屋（ハッタ）が想起され、その後の第7章 "The Lion and the Unicorn" で白の王の二人の使者としてヘイア（Haigha= 三月ウサギ）とハッタ（Hatta= 帽子屋）が登場する。

第5章において、白の女王が「前に働く記憶」をアリスに説明する際、最もよく覚えている（remember）こととして、再来週に起こったことを挙げる。

「いつごろのできごとが一番思い出しやすいのですか？」と思いきってアリスはきいてみました。

「ああ、それはね、さ来週に起こったことなんですよ。」むぞうさな調子で女王は答えました。「たとえばね、」と女王は話しつつげながら、大きなこう薬を指にはりつけました。「王さまの使者がいます。その人はいま罰せられてかんごくにはいっていますが、ほんとは次の水曜日までは裁判は始まらないのです。それに、使者が罪をおかすのはむろん一番あとのことです。」¹⁶

ここでいわれている使者が帽子屋であることは、テニエル¹⁷の挿絵から見て取れる。キャロルがテニエルの描く挿絵に細かく注文をつけていたこと¹⁸からも、ここでの使者が帽子屋を指していることは間違いない。帽子屋は、罪を犯すよりも、裁判よりも前に牢に入れられているが、後の7章でわかるように、牢から出た後も彼のティー・タイムは続いている。

第7章で帽子屋と三月ウサギは、白の王の二人の使者ハッタとヘイアとして登場する。彼ら二人は行きの使者と帰りの使者であり、二者でひとつの（ひとりの使者としての）役割を担っている。

また、ヘイアがアリスと白の王の元に来るまでの会話において、白の王が二人の使者のうちのどちらかが来るのが見えるかとアリスに尋ねた際、アリスは「だれもいない（nobody）」と答えるのだが、その "nobody" という言葉を白の王はそのまま名詞 "Nobody" として受け取ってしまう。

「[……] 伝令もふたりとも残しておいたのだ。やつらは町まで行ってしまったからな。どうだな、ちょっと道の方を見わたして、ふたりのうちのどちらか見えるかどうか教えてもらえんかな。」

「いいえ、道に見えるのは、だれもいない——」とアリスは言いました。

「ふん、そんな目玉がもちたいものだ。」王さまはいらいらして申しました。「『だれもいない』のが見えるなんて！おまけにあんな遠いところだ！このくらいの明るさじゃあ、わしの目にはほんものの人間が見えるくらいがせいぜいなのだよ！」¹⁹

鶴見によると、この nobody の実体化は誰でもない、名づけられないものとしての位置を示す狂気の例であるという²⁰。Nobody とは、行きだけの役割を担い、来るという役割のないハッタの存在を示していると考えられるのではないだろうか。来る (come) と行く (go)、取る (fetch) と運ぶ (carry) はそれぞれ、一連の流れの二つの側面であり、本来は使者という役割において表裏一体をなす、切り離すことのできないものである。来ることがなければ行くこともないし、取ることがなければ運ぶこともない。そういった行為を二つの役割として二者に分割されてしまったために、ヘイアが来る際、誰でもないもの (Nobody) としてともに存在していなければならなかったのではないだろうか。

こうした帽子屋と三月ウサギの二者性は、彼らの狂気に関わるものであると考えられる。以下では、帽子屋と三月ウサギが何故「狂っている」といわれるのか、彼らの狂気が何を指すのかを明らかにしていく。

3. 帽子屋と三月ウサギの「狂気」

帽子屋と三月ウサギは、狂気の様を表す二つの慣用句 "mad as a hatter" と "mad as a March hare" から生み出されたキャラクターである。彼ら二人は作中においてもチェシャ・ネコによって「狂気だ」といわれるキャラクターであるが、同時にチェシャ・ネコは「ここにいるものはみな狂っている」ともいう。テニエルの挿絵では、三月ウサギが頭に麦わらを巻いた姿で描かれており、キャロルは『子供部屋のアリス』(1890)においてわらが狂気の象徴であると解説している²¹。

帽子屋と三月ウサギの狂気がどのようなものであるかは、帽子屋自身によって以下のように話される。

ぼうし屋は悲しそうに首をふりました。「おれのじゃない！」と彼は返事しました。「こないだの三月、おれたちは——（とお茶のスプーンで三月ウサギをゆびさしながら）——ちょうどこいつが気ちがいになる前だが、こいつ [時] とけんかしたのさ。——ハートの女王のまよおされた大音楽会のときだったが、おれは歌わなきゃならなかったんだ、

『きらきら、ひかれ、小さなこうもり、
いったいおまえは、何ほしい！』

たぶん、この歌は知ってるな？」

「似たようなのなら、聞いたことがあるわ」とアリスは言いました。

「そら、先をつづけるぞ」と言ってぼうし屋は先を歌いました。「こんなぐあいさ——

『この世をはるか下に見て
おぼんみたいにみそらを高く。
きらきら、きらきら——』

[…中略…]「ところで、おれが第一節を歌い終わるか終わらないというところで」とぼうし屋は言いました。「女王はどなりだされたのだ、『こやつ、時をつぶしておるぞ！こやつ、首をちょんぎれ！』」

「まあ、なんてひどいの、やばねえ！」とアリスはさげびました。

「それからというもの」とぼうし屋は悲しそうな口調でつづけました。「時のやつ、おれがたのむことを何ひとつやってくれない！このごろは、いつみても六時なんだよ」²²

帽子屋は、ハートの女王が「調子が外れている」「(作品を) 台無しにする」という意味の慣用句として発した「時間を殺している (murder the time)」という言葉によって、時 (Time) とけんか (quarrel) をし、それ以来常に6時のティー・タイムにいるのだという。その出来事は3月のことであり、発情期である3月に狂ったようになるウサギの様子からその存在を名づけられている三月ウサギは、帽子屋と同時に狂い、時を止めているのである。つまり帽子屋と三月ウサギの狂気とは、6時のティー・タイムで時が止まっていることなのである。しかし、時を殺したのは帽子屋であって、帽子屋と三月ウサギの二人が殺したわけではない。三月ウサギは何故、帽子屋とともに時を止めているのだろうか。

帽子屋と三月ウサギは、『鏡の国』において、ひとつの役割の二つの側面としての白の王の二人の使者、ハッタとヘアアとして再現される。白の王は「私には二人必要だ——来るのと行くのと。ひとりは来るために、ひとりは行くために (I must have two, you know——to come and go. One to come, and one to go²³)」とアリスにいう。あるいはまた、「私には二人必要だ——ひとりは取るため、ひとりは運ぶために (I must have two——to fetch and carry. One to fetch, and one to carry²⁴)」とも述べている。

帽子屋が「時間を殺している」といわれたことによって、帽子屋と三月ウサギの双方の時間が止まってしまうこと、一連の行為の二つの側面が帽子屋と三月ウサギの二者によって担われるということは、帽子屋と三月ウサギにおい

ては、一方の行為の帰結がもう一方においても現れるということになる。つまり、帽子屋と三月ウサギの狂気には、二つの様相がある。ひとつは、時が止まっていることであり、もうひとつは、行きと帰りの使者の例にも見られるように、一方の行為の結果が他方においても現われるということである。時間の停止によって、彼らにとってすべての出来事は同時に起こることになる。すべての出来事が同時に、一挙に起こることによって、帽子屋と三月ウサギは自己同一性を保つことができない。自己同一性を喪失し、自己と他者を分けることのできない彼らにおいては、一方の行為の結果が他方においても現れるということが起こるのである。

これまで帽子屋と三月ウサギの登場場面を詳細に見てきたが、『アリス』作品に登場する他のキャラクターは、帽子屋と三月ウサギと何が異なるのだろうか。何故、彼ら二人だけが『不思議の国』と『鏡の国』の両作品に登場するのだろうか。以下では、帽子屋と三月ウサギと、他のキャラクターとを二者性の観点から比較し、その差異と共通点を明らかにする。

4. 二者の表れ方

本節では、帽子屋と三月ウサギの他に作中に登場する二者の表れ方についての考察を行う。

4-1. ティードルダムとティードルディー——識別不可能な二者

『アリス』作品において二者であるということを考えたとき、まず浮かぶのは双子の兄弟、ティードルダムとティードルディー (Tweedledum and Tweedledee) である。彼らは『鏡の国』において、鏡に映った対称な姿をもつものとして登場する。彼らの語源は、よく似た2人、うり2つの人物という意味のジョン・バイロン²⁵の造語である²⁶。彼ら二人は、すべての別れ道において同じ方向を指し示す道しるべの先に住み、襟の刺繍以外では区別をつけることができない。彼らは童謡の中で歌われているとおりに壊れたがらがらによってけんかをする。彼らの名は、傍目には違いのわからないようなことでいがみあう二人を表す比喩としても使われる²⁷。彼ら二人は、アリスとの握手のために互いに抱き合っている方の手、すなわち、右手と左手をそれぞれ差し出すことにも表れているように、互いの鏡像であり、見た目においてもその性格などにおいても区別をつけることのできない存在となっている。彼らのように、同じ方向に住む同じ姿かたちをもつ二人は、それぞれ別の意識をもつ二人のキャラクターであるが、そうしたかたちの上で全く異なるところが無い。ティードルダムとティードルディーの二者性は、二者の識別が不可能なものである。

4-2. 赤の王の夢とアリスの夢——合わせ鏡の中の二者

双子の兄弟は、彼らとは異なる二者のあり方をアリスに向かって提示する。それは、全く異なる二者でありながら、容易に切り離してしまうことのできない二者のあり方である。二人がアリスに見せるのは、眠り込んだ赤の王の姿である。二人はアリスに、以下のようにいう。

「[[彼は] いま夢を見てるとこなんですよ。」とティードルディーが言いました。「それで、どんな夢見てるとお思いですか？」

アリスは答えました、「だれにもわかりっこないわ。」

「どうしてです、あなたの夢を見てるんだのに！」と、ティードルディーがさげびました。かちほこったように、両手をぱちんとたたきながら。「それじゃ、その夢を見るのをやめたら、あなたはどこにいることになると思います？」

「わたしのいまいるところよ、もちろん。」とアリスは答えました。

「ちがいますって！」あざけるようにティードルディーは言いかえします。「あなたはどこにもいないことになるんですよ。なぜって、あなたはあの人の夢の中にすんでるものにすぎないからです！」

「もし王さまが目をさますはめになったら、さいご、」とティードルダムがつけくわえます。「あなたはおしまいです。——ばあっと——ちょうどろうそくが消えるみたいにね！」²⁸

ここでは、『鏡の国』全体のテーマともなる「夢をみたのはアリスか、赤の王か」という大きな問いが提示されている。ここには、アリスが赤の王を夢に見ており、その夢見られている赤の王はアリスを夢に見ており、そのアリスは赤の王を夢に見て……という合わせ鏡のような無限退行が現れる。その無限退行の中で、『鏡の国』の物語というひとつの夢を見ているアリスと赤の王という二者が混じり合っているのである。赤の王はアリスの夢の一部であり、また、アリスは赤の王の夢の一部である。二人はティードルダムとティードルディーのように区別のできない二者ではなく、全く異なる存在でありながら、互いが互いの夢の一部であるということにおいて切り離すことができず、その夢が一方の夢であると断言することもできない。ここでは、二人の人物が合わせ鏡のように互いの夢の中に入り込んでいるのである。

4-3. アリスの二者性と帽子屋と三月ウサギの二者性

既にみたように、アリスは彼女自身のうちに二者性をもっている。そしてその二者性は、帽子屋が飲食を行うことでアリスの身体が変化する裁判の場面と、夢から覚めたアリスがティー・タイムに向かって駆けていくという物語の最後の場面において、帽子屋と三月ウサギの二者性につながる。

帽子屋と三月ウサギにおいては、ティードルダムとティードルディーにおけるような姿かたちの同一性はないが、常に行動を共にし、白の王の二人の使者としての役割（行きと帰り）に顕著にみられるように互いの行為の中に互いが入り込み、二者でありながらもその意識は同一的であると考えることができる。アリスは二者を演じることで意識を分裂させるが、帽子屋と三月ウサギにおいては、ひとつの意識が異なる二者に分裂している。こうした特徴をもつ帽子屋と三月ウサギの二者関係は、主人公アリスにかかわる二つの二者関係に類似している。つまり、『不思議の国』におけるアリスの同一性の分裂と、『鏡の国』における赤の王との合わせ鏡のような夢の同一性の双方が、帽子屋と三月ウサギの二者関係の内に投影されているのである。

5. 『不思議の国』と『鏡の国』の二作品に現れること

「ここにいるものはみな狂っている」という『不思議の国』において、アリスは意識の分裂、身体の大小によって二者性を表す。また『鏡の国』において、アリスは赤の王の夢との合わせ鏡のような分裂を見せる。『アリス』作品においては、時間が止まっていること、一方の行為が他方にも現れること、意識が同一的であることを「狂気」と呼んでいるのである。『不思議の国』において、二者であることはその場（ワンダーランド）にいる資格となり、『鏡の国』においては、それが鏡に映る姿として表れる。したがって『アリス』作品においては、二者であることの内に「ワンダーランド」、あるいは「鏡の国」といった世界観が表れているのだといえるだろう。帽子屋と三月ウサギはそうした二者性において、『不思議の国』と『鏡の国』の双方に立つことを許された存在なのである。

帽子屋と三月ウサギは時間の停止によって、すべての出来事を回避している。ティー・タイムという宙吊りの時間においては物事が進行せず、帽子屋は女王による「首をきれ！」という罰を回避し、なかったことにするものの、『鏡の国』においては、未だ犯していない罪によって罰せられる役目を負うのである。

注

- 1 Lewis Carroll, 1832-1898. 本名は Charles Lutwidge Dodgson. 数学者、論理学者。
- 2 『不思議の国のアリス』(=*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865) (以下、『不思議の国』)と『鏡の国のアリス』(=*Through the Looking-Glass and What Alice Found There*, 1871) (以下、『鏡の国』)の二作品を指す。
- 3 田尻 (2009) はジェイムソンの疑似カップル論 (1979) を用いて、それが文学における近代と現代の中間に位置する段階にあることを指摘している。近代文学においては、人は自立した個人として振る舞うことが通常であったが、それに対し現代文学は、個人という単位が崩壊する状態の実験へと向かった。その途中段階として、相互依存的で個人の自立性がゆらいでいるような奇妙なカップル状態を扱うような文学というものがさまざまに現れた。ベケットの「疑似カップル」というのもそのひとつであり、おそらくはキャロルにおける二者の表象もそのひとつの表れとして解釈することができるだろう (田尻 2009, pp. 91-3)。
- 4 小泉訳 2007(上), p. 147.

5 生野訳 2004, p. 22 (『不思議の国』第1章). 以下原文。

"Come, there's no use in crying like that!" said Alice to herself rather sharply. "I advise you to leave off this minute!" She generally gave herself very good advice (though she very seldom followed it), and sometimes she scolded herself so severely as to bring tears into her eyes; and once she remembered trying to box her own ears for having cheated herself in a game of croquet she was playing against herself, for this curious child was very fond of pretending to be two people. (Carroll 2001, p. 18.)

6 同上, p. 97 (『不思議の国』第6章). 以下原文。

"Oh, you can't help that," said the Cat: "we're all mad here. I'm mad. You are mad." (Carroll 2001, p. 68.)

7 同上, p. 29 (『不思議の国』第2章). 以下原文。

"Dear, dear! How queer everything is to-day! And yesterday things went on just as usual. I wonder if I've been changed in the night? Let me think: *was* I the same when I got up this morning? I almost think I can remember feeling a little different. But if I'm not the same, the next question is 'Who in the world am I?' Ah, *that's* the great puzzle!" (Carroll 2001, p. 22.)

8 元々は1782年に *The European Magazine* に掲載された4節からなる詩だが、後に第1節のみが Mother Goose に収録された。第1節は以下のとおり。

The Queen of Hearts,
She made some tarts,
All on a summer day:
The Knave of Hearts
He stole those tarts,
And took them quite away!
The King of Hearts
Called for the tarts,
And beat the Knave full sore;
The Knave of Hearts
Brought back the tarts,
And vow'd he'd steal no more.

9 生野訳 2004, p. 170 (『不思議の国』第11章). 以下原文。

[……] he kept shifting from one foot to the other, looking uneasily at the Queen, and in his confusion he bit a large piece out of his teacup instead of the bread-and-butter.

Just at this moment Alice felt a very curious sensation, which puzzled her a good deal until she made out what it was: she was beginning to grow larger again (Carroll 2001, pp.117-8.)

10 生野訳 2004, p. 96 (『不思議の国』第6章). 以下原文。

"In that direction," the Cat said, waving its right paw round, "lives a Hatter: and in that direction," waving the other paw, "lives a March Hare. Visit either you like: they're both mad." (Carroll 2001, p. 67.)

11 帽子屋と三月ウサギ、ヤマネはそれぞれ、madの三様を示しているという解釈もある (平 2005, p. 177)。

12 Carroll 2001, p. 73.

13 同上, p. 74.

14 生野訳 2004, p. 105 (『不思議の国』第7章). 以下原文。

Alice had been looking over his shoulder with some curiosity. "What a funny watch!" she remarked. "It tells the day of the month, and doesn't tell what o'clock it is!"

"Why should it?" muttered the Hatter. "Does *your* watch tell you what year it is?"

"Of course not," Alice replied very readily: "but that's because it stays the same year for such a long time together."

"Which is just the case with *mine*," said the Hatter. (Carroll 2001, pp. 74-5.)

15 同上, pp. 109-10 (『不思議の国』第7章). 以下原文。

A bright idea came into Alice's head. "Is that the reason so many tea-things are put out here?" she asked.

"Yes, that's it," said the Hatter with a sigh: "it's always tea-time, and we've no time to wash the things between whiles."

"Then you keep moving round, I suppose?" said Alice.

"Exactly so," said the Hatter: "as the things get used up."

"But what happens when you come to the beginning again?" Alice ventured to ask.

"Suppose we change the subject," the March Hare interrupted, yawning. "I'm getting tired of this. I vote the young lady tells us a

story." (Carroll 2001, p. 77.)

16 生野訳 2005, p. 101 (『鏡の国』第5章). 以下原文。

"What sort of things do you remember best?" Alice ventured to ask.

"Oh, things that happened the week after next," the Queen replied in a careless tone. "For instance, now," she went on, sticking a large piece of plaster on her finger as she spoke, "there's the King's Messenger. He's in prison now, being punished: and the trial doesn't even begin till next Wednesday: and of course the crime comes last of all." (Carroll 2001, pp. 206-7.)

17 John Tenniel, 1820-1914. イギリスの風刺画家。『不思議の国』と『鏡の国』の挿絵を手がけた。

18 Hancher 1997, pp. 170-86.

19 生野訳 2005, p. 145 (『鏡の国』第7章). 以下原文。

"...And I haven't sent the two Messengers, either. They're both gone to the town. Just look along the road, and tell me if you can see either of them."

"I see nobody on the road," said Alice.

"I only wish *I* had such eyes," the King remarked in a fretful tone. "To be able to see Nobody! And at that distance too! Why, it's as much as *I* can do to see real people, by this light!" (Carroll 2001, p. 234.)

20 鶴見 1986, pp. 44-5.

21 わらは、当時テニエルが活躍していたイギリスの風刺漫画雑誌『パンチ』（1841年創刊）をはじめとする政治風刺漫画において、狂気を表す徴として常套的に使用された道具であった (Hancher 1997, pp. 82-95)。

22 生野訳 2004, pp. 107-9 (『鏡の国』第7章). □内は引用者による補足。以下原文。

The Hatter shook his head mournfully. "Not I!" He replied. "We quarreled last March----just before *he* went mad, you know—" (pointing with his teaspoon at the March Hare,) "—it was at the great concert given by the Queen of Hearts, and I had to sing

'Twinkle, twinkle, little bat!

How I wonder what you're at!"

You know the song, perhaps?"

"I've heard something like it," said Alice.

"It goes on, you know," the Hatter continued, "in this way:—

'Up above the world you fly,

Like a tea-tray in the sky.

Twinkle, twinkle——"

[……] "Well, I'd hardly finished the first verse," said the Hatter, "when the Queen bawled out 'He's murdering the time! Off with his head!'"

"How dreadfully savage!" exclaimed Alice.

"And ever since that," the Hatter went on in a mournful tone, "he wo'n't do a thing I ask! It's always six o'clock now." (Carroll 2001, pp. 76-7.)

23 Carroll 2001, p. 235 (『鏡の国』第7章).

24 同上。

25 John Byron, 1692-1763. 詩人。

26 Gardner 1980, p. 70.

27 同上。

28 生野訳 2005, pp. 86-87 (『鏡の国』第4章). □内は引用者による補足。以下原文。

"He's dreaming now," said Tweedledee: "and what do you think he's dreaming about?"

Alice said "Nobody can guess that."

"Why, about you!" Tweedledee exclaimed, clapping his hands triumphantly. "And if he left off dreaming about you, where do you suppose you'd be?"

"Where I am now, of course," said Alice.

"Not you!" Tweedledee retorted contemptuously. "You'd be nowhere. Why, you're only a sort of thing in his dream!"

"If that there King was to wake," added Tweedledum, "you'd go out—bang!—just like a candle!" (Carroll 2001, pp. 197-8.)

引用・参考文献

- [1] Carroll, Lewis. (1865), *Alice's Adventures in Wonderland*, Macmillan. (生野幸吉訳 (2004), 『ふしぎの国のアリス』, 福音館書店)
- [2] ———. (1871), *Through the Looking-Glass and What Alice Found There*, Macmillan. (生野幸吉訳 (2005), 『鏡の国のアリス』, 福音館書店)
- [3] ———. (1890), *The Nursery "Alice"*, Macmillan. (高橋康也・高橋迪訳 (2003), 『子供部屋のアリス』, 新書館)
- [4] ———. Gardner, Martin (ed.) (2001), *The Annotated Alice: The Definitive Edition*, Penguin Books. (マーチン・ガードナー注, 石川澄子訳 (1980), 『不思議の国のアリス』, 東京図書. / 高山宏訳 (1980), 『鏡の国のアリス』, 東京図書)
- [5] Deleuze, Gilles. (1969), *Logique du sens*, Les Éditions de Minuit. (小泉義之訳 (2007), 『意味の論理学 上・下』, 河出文庫)
- [6] Jameson, Fredric. (1979), *Fables of Agression: Wyndham Lewis, the Modernist as Fascist*, University of California Press.
- [7] Hancher, Michael. (1990), *The Tenniel Illustrations to the "Alice" Books*, Ohio State University Press. (石毛雅章訳 (1997), 『アリスとテニエル』, 東京図書)
- [8] 平倫子 (2005), 「19世紀英国の近代化と狂気——ルイス・キャロルの身体医文化論——」, 『北星学園大学文学部北星論集』42巻2号, 北星学園大学, pp. 161-182.
- [9] 田尻芳樹 (2009), 『バケットとその仲間たち』, 論創社.
- [10] 鶴見精二 (1986), 「狂気と夢—そのテキスト性」, 『沖縄大学紀要』第5号, 沖縄大学教養部, pp. 41-67.

The Representation of Twoness in Lewis Carroll's Alice Stories

KADOTA Asana

Abstract:

In Lewis Carroll's Alice stories, one noteworthy theme is the quality of twoness. For example, twoness is seen in the splitting of Alice's consciousness or in the changes in her body size between large and small. Indeed, twoness is seen in many other characters in the Alice stories. But, among all the characters, the Hatter and the March Hare occupy a special position in the Alice stories: they always appear together, they are the only characters, besides Alice, appearing in both of the stories, and they are said to be "mad." This paper aims to interpret the representation of twoness in the Alice stories through an analysis of the Hatter and the March Hare based on *The Logic of Sense* (1969), Gilles Deleuze's interpretation of the Alice stories. In the work, Deleuze says "one is always mad in tandem." The paper shows what kind of situations are shown to be mad in the Alice stories. Moreover, it proposes that the meaning of the Hatter's and March Hare's appearance in both stories can be found in their madness in twoness.

Keywords: twoness, mad, Lewis Carroll, Alice stories, the Hatter and the March Hare

ルイス・キャロルの『アリス』シリーズにおける二者性の表現

角 田 あさな

要旨：

ルイス・キャロルの『アリス』シリーズにおいて注目すべきテーマの一つは、二人で一組をなすことである。そもそも主人公アリス自身が、意識の分裂や身体の大小変化など様々に「二者性」と呼べるものを見せる。こうしたアリスの特徴は、他のキャラクターの二者性に関係をもつと考えられる。なかでも、帽子屋と三月ウサギは特権的である。彼らは物語の中で常に二者で現われ、アリスを除いて唯一『不思議の国』と『鏡の国』の両作品に登場する。本稿では、『アリス』シリーズにおける二者性の表現について、作中で「狂気 (mad)」と明言される帽子屋と三月ウサギを中心とし、「二者で狂う」(ジル・ドゥルーズ) ことの意味を考察する。作中で狂気として示されることがいかなる事態であるのかを明らかにし、本稿は最終的に、帽子屋と三月ウサギだけが両作品に登場できることの意味は、彼らの二者としての狂気性の内実に関わるという解釈を提起する。

